『武道伝来記』の二重構造

―「平家」素材の利用方法から―

金　栄　哲

〈一〉

和朝兵揃の中に、為朝のくろがねの弓、むさし坊が長刀、朝比奈がちからこぶ、かげ清が眼玉、これらは見ぬ世の事、中古、武道の忠義、諸国に高名の敵うち、其はたらき聞伝て、筆のはやし詞の山、心のうみ静に、御松久かたの雲に、よろこびの舞鶴是を集ぬ。[1]

貞享四年に刊行された『武道伝来記』の序文において、「中古」という時代が設定されている。この中古が何時のことであるかについては、まず前田金五郎氏の「近世初期の、寛永・正保ごろまでを含む」[2]とする意見がある。氏は、『諸艶大鑑』巻一の五の「よしや、中古の吉野は、千本の山桜にすぐれて」を根拠に、島原の遊郭が六条三筋町にあった時代の二代目吉野太夫を指すとして、慶長七年から寛永十七年までを中古とする。そして、『武道伝来記』巻三の一に「出羽の国庄内に、昔日徳岡伊織とて、中古、御家に済て、七十三歳まで、堅固に相勤しが」とあることから、「仮りに、三十歳で奉公したものとすれば、貞享四年から逆算すると、この中古は、正保元年に当たる」とする。その他幾つかの証拠を出して、この「中古」という語の指す時代は、寛文・天和期の史実を利用したと見られる例外的題材を除いて、「近世初期の敵討物語を綴る意図」により、寛永・正保ごろまでの近世初期を意味するとする。

しかるに谷脇理史氏は、前田氏の主張の問題点を指摘している[3]。『武道伝来記』に明記されている実在の年号が巻一の三の「天正の比」(1573-1591)・巻五の一の「後柏原院、大永の比」(1521-1527)・巻五の四の「天正三年十月廿八日の夜」の三例だけであることを指摘し、時代は江戸時代以前に設定しておきながら、その話に登場する武士の姿が当時の武士の姿であるのはなぜか、と問いかける。そして巻五の四「火燵もありく四足の庭」の話に注目する。

ある家に集まった「朋友四五人」が長い夜のつれづれに百物語を始める。九十九人まで語ったときは「目を見合せ、手に汗を握り、身柱もとより何ものやら抓たてると、榑縁より、爪の長き物這出る音、頻りなるに、心魂も消々となりながら、さすがすくみも果ず」と描写されている、臆病な武士たちが変な音に驚き唾で障子に穴を開けてみたら、炬燵が縁側をおりて霜枯れた菊畑に走っていく。家の主人が手鑓を引き下げて突き詰めた後に、外の武士たちは駆けつけてきて手柄を褒め称える。そして証拠状を作り連判を押してから布団をめくると、炬燵の中には何と犬が入っていたのである。怖さですぐ外に出られない臆病な武士たちと、犬を殺して手柄の証拠状に連判を押した武士たちの滑稽な様を描くこの話は、後に敵討ちへと展開していくが、谷脇氏は、この事件を天正三年(1575)の話として設定したのは当世の話ではないことを強調したかったからである、とする。『武道伝来記』が刊行される二年前の貞享二年ごろから生類哀れみの法令が出始め、犬をつき殺す武士の話を当世の話として書くことは取り締まりに触れる危険があるから[4]、時代を江戸以前に設定したのだ、というのである。

ほかにも、氏は多数の章の話を挙げて具体的な証明を行っている

が、とりあえず結論は、『武道伝来記』は近世初期の敵討ちの話として書かれたのではなく、巻二の一（福嶋政則時代として慶長六年から元和五年までと推定）と巻一の四（「関ヶ原の陣」とあるから慶長・元和頃かと推定）の例もあるから、慶長・元和を含めるけれども江戸時代ではないことを前提に時代設定をしていたとする。その原因を支配者階級の武士に対するカムフラージュとみるわけである。

「中古武道の忠義、諸国に高名の敵うち、其はたらき聞伝て、筆のはやし詞の山」をなしたと西鶴が序文に記すこの作品には、内容的にも敵討ちの実体を描くことから外れるような話が多数収められており、平和な時代の武士の姿を描きながら、中古という時代を設定するしかなかった理由を、一町人という立場で支配階級である武士を題材にして話を作るとき、武士の否定的な側面も多少触れかねないという自粛の態度によって、ことさら時代をずらしたという見方が可能である。そこには出版取り締まりを懸念して自制したとの背景もあったであろう。確かに被支配階級の町人作家である西鶴と版元としては、武士階級の視線を全く無視するわけにはいかない問題であったろう。であるから、序文の「武道の忠義・高名の敵討ち」云々は、表向きのカムフラージュの文句になるわけである。つまり、『武道伝来記』の時代を江戸以前にすることは、作品の内容にある種の表裏を持つ二重の世界が存在することを物語るのである。

『武道伝来記』巻四の三「無分別は見越の木登」の冒頭文には、当時の武士に対する次のような批評がある。

今時は、武道はしらひでも、十露盤を措ならひ、始末の二字を名乗ば、何所でも知行の種となりて、諸代の筋目正敷者は、かならず先知を減少せらる。世は色々にかはりて、今より末々は、諸侍たる者、刀の代に秤を腰にさして、商ひはやるべし。

これは、この章に登場する経済官僚型の武士を風刺したものという指摘があるように[5]、西鶴の脳裏にあった当時の武士像の一面をあらわすものである。舞台が肥後になってはいても、江戸に比べて武士人口の極端に少なかった大坂の「武士もまた商人の気風に染まり、利益を謀ることに敏感になり、「質朴の風」はなくなっていた[6]」町人の町で見かける武士のイメージが投影されていたと見てよい。「今より末々は、諸侍たる者、刀の代に秤を腰にさして、商ひはやるべし」と予見する程、当時の大坂の武士は町人の気風に染まっていたからである。

もう一つ、巻二の二「見ぬ人皃に宵の無分別」の例を見よう。妙春という後家の針医が武家の奥方の病気等に針治療をしてまわるうちに、十八歳になるまで縁組が出来ず気鬱症に悩んでいた娘の治療をすることになる。その家にはお使い番を勤める二十六歳の武芸に達者な武士がいたので、嫁入り頃の娘を捜している武士にその娘との縁談を取り持つことになる。しかし、式を挙げる日になって、美人を好む武士は人並みでもない娘の顔を見て腹を立て、娘を実家へ連れ戻せと言う。妙春はもったいぶって、

挟箱の蓋をあけて、金子弐百両取出して、「右に御契約は申さね共、あなたの御手前よろしきゆへに、此小判を送らるゝなり。今の世の中は、かうした事が勝手づく、女房がよいとて、御身躰のたよりにはなりませぬ。御ためのあしき事はいたさぬ、

という。武士の口から言わせた話ではないが、当時の世間で経済的に没落しかかっている武士の立場がどのようなものであったかを想像させるに十分な話である。というのは、序文で「中古」という時

代設定を建前にしてはいるが、作品中には戦乱のない平和な当時を生きていく武士の姿が描かれていることを証明していることになる。

町人的な発想で書かれる武士の話が『武道伝来記』の全部を占めているわけではない。見事に敵討ちの本望を達成して、もっとも武士としてのありようを褒め称える話も多く書かれている。しかし、敵討ちをテーマにしているものの、敵討ちを武士階級を代表する思想として理想的とは思っていないような話が多く存在するのも事実である。また、作品の内容にのめり込まず、常に客観的な視線を保ちつづけている西鶴ではあるが、『武道伝来記』の場合、他の作品で度々見かけるような批評文も余り見られない。それほど傍観的な書き方をしているのである。それは町人作家として武士を題材にして作品を書くときに、どうしても乗り越えられない力量の限界と、被支配階級の町人西鶴が武士階級を対象に話を作るとき、目に見えない圧力を感ぜざるをえなかった身分の障壁があったとも考えられる。それにしても『武道伝来記』の敵討ちと武士たちは、一つの話の中で有機的にかみ合っていない。そこには時代設定だけではなく、武士に対する西鶴の多面的な視線で見るイメージが創作の上で働いていたのであろう。

『武道伝来記』に書かれた敵討ちの典拠については、前述した前田金五郎氏の研究に詳しく言及されている。なかでも、巻七の二「若衆盛は宮城野の萩」が寛文十二年江戸市ヶ谷の浄瑠璃坂で起こった、奥平源八等の三十七人が敵の奥平隼人の屋敷に討ち入り、敵方の十七人と乱闘したという事件を[7]、巻八の四「行水でしるゝ人の身の程」が伊賀上野で起こった、荒木又右衛門・渡辺数馬等が河合又五郎を打った史実をモデルにしたことは、事件の様子と地名などの一致で典拠が明確に分かる話である[8]。その他の話の場合は、谷脇氏の指摘のように、時代・人名・地名などを含めて、事件の真相が明確に分かるような話ではない。その原因として支配階級としての武士を認識するしかなかったこともあるはずだが、具体的な史実に基づいた話の書き方をせず、漠然とした知識に頼りがちな西鶴の創作方法、あるいは俳人時代から訓練されている俳諧の連想方法もかなり影響しているようである。

武士は大義名分を重視する人間であり、それが具体的に行動として現れるのが敵討ちである。敵討ちは大義名分を命よりも優位に置く価値観なので、敵を討つことによって常に打たれることに備えなければならない。常に死ぬ覚悟をして生きる武士は、戦乱のない江戸時代の町人(作家・享受者ともに)の立場から見ると、無常というイメージを背負っている人間として映るわけであろう。名誉を重視する生き方によって常に武士の生につきまとっている死と無常という連想が働いたようである。というのは、『武道伝来記』の冒頭の章には、無常を暗示するかのように、『平家物語』の世界がうかがえるからである。

〈二〉

巻一の一「心底を弾琵琶の海」には、主君の寵愛を受けていた衆道関係の二人の若侍の話が章全体の七割以上を占めている。主君は出家し、庵を結んで隠遁してから、人に会わず修行に励んでいる内に病に悩まされる。二人の若侍は、主命を背いてまで庵室に駆け込む事は出来ず、漁師の小舟を借りて、蓑笠姿で釣りをする老人に身をやつし、琵琶と琴を弾きながら汀づたいに庵室の裏側に廻る。主

君は琴の音に心引かれて窓を開けるが、

歌壹暖響春光融々、舞殿冷袖風雨凄々。春秋のしづかに、世の替れる有様、覚る間もなき夢なり。しばしも是に気をうつして、江はよく舟をうかべ、又よく舟を覆すの道理、おこなひのさはりなり。明鏡に像の跡なく、虚空の色にそまざるごとく、

と、呟きながら窓を閉めようとする。やっとの事で対面できた二人は、蓑笠を脱ぎ捨て自分達を側に置くことを乞う。しかし主君は、二人を諦めさせようと思い、ありもしない日頃の不忠をかこつけ勘当を言い渡す。二人は主君の死が間近になったと思い、主君の死出の山路の案内をしようと先腹を切って殉死する。

これは冒頭の章であるが、敵討ちの話ではない。西鶴は、二人の若侍の中の秋津左京に横恋慕していた関屋為右衛門が左京の悪評をするのを、同座していたもう一人の若侍の弟の森坂求馬が彼を切る形で結んでいる。敵討ちは付けたりのようになっているこの話が冒頭の章に位置することに、疑問を抱かざるを得ない。まして、引用文の「江はよく舟をうかべ、又よく舟を覆す」道理という文句は、『平家物語』（巻三「城南之離宮」）・『源平盛衰記』（巻十二「静憲鳥羽殿へ参る事」）・『太平記』（巻三十七「新将軍京洛事」）などと一致するので、西鶴の創作意図を探るのに有効な手懸かりになる。西鶴がこの文句を用いたのは、どういう経路を辿ってきたか考える必要もない。近世初期までは琵琶法師の語りの伝統もあり、『源平盛衰記』・『太平記絵巻』などの書物や絵巻で『平家物語』の世界は近世初期の人々に親しまれていたからである。西鶴程の俳人なら謡曲の修羅物などでも馴染んでいたはずである。論を複雑にすることを避けるために『平家物語』を例にして話を進めることにする。

平清盛が鹿ヶ谷で平氏討滅の密議に加担した人々の処罰をして、後白河法皇を鳥羽殿へ監禁する話が巻三の「法皇被流」から「城南之離宮」まで書かれている。高倉天皇は鳥羽殿へ手紙を出して出家の望みを伝えるが、法皇の引き留めの返事を受け取り激しく涙にくれる。そのことが描写された後、地の文で「君は舟、臣は水、水よく船をうかべ、水又船をくつがえす。臣よく君をたもち、臣又君を覆す。保元、平治の比は、入道相国、君をたもち奉るといへども、安元、治承のいまは、又君をなみし奉る」という文句が載せられている。下克上の激しい時代の君臣関係をあらわす表現として広く使われていたこの文句が、『武道伝来記』の冒頭章にも現れるというのは、『平家物語』の後白河院の鳥羽殿監禁のイメージが生かされているからであろう。引用文の共通はもちろんの事、他にも共有する話の要素が見えるが、それを纏めると次のようになる。

（『平家物語』）

○法皇の鳥羽殿監禁と清盛によって鳥羽殿へいくことは誰もゆるさない。

○高倉天皇は悲しみにくれて、出家の望みを書いた手紙を鳥羽殿へ出すが、法皇は引き留める。

○鳥羽殿への新年の見舞いに、信西の子息桜町の中納言成範と弟左京大夫長教だけが許される。

○上皇になった高倉天皇は厳島御幸の時、鳥羽殿へ寄った後、鳥羽の草津で船で下る。

（『武道伝来記』巻一の一）

イ、主君の平尾修理は入道して屋敷を離れ、山陰の庵に閉じこもって誰の訪問も拒む。

ロ、寵愛を受けていた二人の若侍は船に乗ってきて、自分たちを側に置いて使うことを乞うが、勘当される。

ハ、二人は先腹を切り、眼夢と名を改めていた主君は悲しみ、三日後命絶える。

全く無関係に見える話も、このように対照してみると似ていることが分かる。複雑な人間関係が主従の三人に単純化されていること、二人が先腹を切って死ぬ結末を除けば、『平家物語』の法皇の鳥羽殿監禁を前後した話の世界の監禁・出家・二人の見舞い・船といった要素が、そのまま生かされている。これは武士の世界を素材に話を書こうとした時、乱世の武士のイメージとして脳裏に刻まれている『平家物語』の後白河院の鳥羽殿監禁事件の世界が連想されていたことを物語る。法皇の鳥羽殿監禁事件が連想されなくては、このように似通った話が作られるはずがない。敵討ちと直接の関連を持たない主従三人の話が冒頭章に位置しなければならぬ理由がない以上、『平家』の世界を利用した話の構成方法によるものと認めるしかなかろう。もちろん巻一の一の話が『平家』の世界をまるごと利用した二番煎じというのではない。西鶴は『平家』を下地にはしているが、先腹を切る話をもって、序文の「中古武道の忠義」の話に仕立てている。そして死んだ若侍の弟が悪い評判を広める同僚の侍を切る話を持ちだして、敵討ちの辻褄を合わせている。法皇への見舞いが許された二人の中の左京太夫長教を意識したかのように、敵討ちの原因とされた先腹を切る二人の若侍中の一人の名前が「秋津左京」になっているのも、連想の証拠としてみてよい。

前田氏は、この森坂采女と秋津左京の殉死を、次のように『増補筒井家記』の史実からヒントを得て「脚色したのかも知れない」という。

「増補筒井家記」・巻三に、大和の豪族、筒井順慶が、天正十二年八月十一日、享年三十六で病死した際、その小姓であった、布施春行の猶子次郎八、十九歳と、万財備前守の次男、次郎九郎、十九歳との二人が、殉死したが、両人ともに、無双の美童であったという。[3]

時代が天正であるという事で、氏の主張する中古の話としてこの事件が取り上げられた可能性も否定しきれない。しかし、氏も脚色したの「かもしれない」と述べているように、充分な証拠といえない以上、二人の美童の殉死した事件だけを根拠にこの章の典拠とすることは、多少無理がある。敵討ちとも直接の関連のない話が冒頭章を飾ることに疑問を呈する谷脇氏も、前田氏の引用した天正の事件を脚色したというより、寛文三年(1663)五月の殉死禁令を背景に書かれている場面とする。この時代設定の問題を除外して単純に考えても、話の中で殉死事件の占めている比重が大きいとはいえない。たとえ天正の殉死事件をモデルにしたとしても、敵討ちとは直接の関連を持たないこの話は、『平家』の二人だけが新年の見舞いに許されるという後白河院監禁事件の背景を利用しているから、忠義の武士として殉死した二人の美童の話になり得たのである。

このように見てくると、巻一の一「心底を弾琵琶の海」は大きく二つの話によって成り立っていることになる。全体の七割を占める『平家』の世界を利用した、先腹を切って忠義を示す話と、死んだ侍の悪評が原因になる敵討ちの話である。悪評する者を切る話が敵討ちになるかどうかも厳密に言えば問題なので、この話は序文の「中古武道の忠義」という前提にこだわっていた印象が強く残る。

当然『平家』の清盛の横暴として法皇の監禁は、忠義という武士の道徳と倫理から見て非難すべき事件であり、その事件を利用して忠義の見本を見せるかのように先腹を切る武士に書き換える西鶴の才能には、武士階級の視線を意識した意図的に誇張した忠義の形象化が気付かされる。修行の邪魔になる琵琶と琴の音という意味で、主君眼夢入道がつぶやく、どことなく場所違いの「江はよく舟をうかべ、又よく舟を覆すの道理」という文句の背景には、無常の主題を持つ『平家』の話を利用して忠義の話に書き換えようとする西鶴の過剰意識という原因があったようである。

それは、一巻に収められている四話の敵討ちが付けたり的な位置づけしかできず、話の中心は武士の勇猛果敢な側面（一の二）、名誉と体面（一の三）、武士同士の義理（一の四）等にあることでもわかるように、序文で示した「中古武道の忠義」にこだわったためである。漠然とした武士階級のイメージが争乱の時代の武士の物語である『平家』の世界へと連想作用を起こさない限り、ただの殉死事件が話の分量の七割を占めながらも主題の敵討ちと直接的関連を持たないはずがないだろう。忠義への過剰意識も清盛の横暴を前提としているから可能なわけだし、谷脇氏の疑問視する敵討ちかどうかの問題を持つこの章の冒頭章への位置づけも、西鶴の意識の中では可能になるわけである。一巻の四章の話は敵討ちよりも武士の武士たるべき有様に拘っているのである。

巻八の三「幡州の浦浪皆帰り打」は、冒頭文に「昔は、名馬を持事、第一にたしなみぬ」とある。序文で強調したはずの時代設定に対する意識が薄れてきたのか、西鶴は、これから展開する名馬を自分の物にしようとする武士たちの話が当時の話であることを思わず言ってしまう。播州の小湊井右衛門は、馬商人から十五両ほどの代金を翌朝に払うことにして名馬を買ったが、馬商人は金を貰ったわけでもないので、金三枚（大判三枚で二十四両程の金額）を提示する出来出頭の樽木工弥に、井右衛門の留守のうちに馬を引き出してきて渡した。後でこの事実を知った井右衛門は激怒し、馬商人に、どんなことがあってもまず馬を引いてこいと叱る。困った馬商人は、馬は木工弥の所有であると念を押して馬を貸してくる。馬を引いてこさせた井右衛門は、馬商人に金子十五両を渡して受け取りの証文を書かせる。刀の威勢に威圧された馬商人には、受け取りの証文を書いてその場で逃げてしまう。互いに人前で名馬に乗って見せびらかしたことのある二人なので、木工弥は馬を井右衛門に取られたと評判が立つのは武士としての一分が立たずと思い、果たし状を井右衛門に送る。結果は木工弥が打たれて、木工弥の子息の孫七ら四人が敵討ちをするモティーフを作るわけである。

この章も敵討ちの主題に忠実な話とはいえない。子息孫七と弟宇助が敵討ちに出るが、井右衛門を捜せず江戸に留まる。宇助は敵を捜すよすがになるかと思い、江戸で小姓分になるが、その仲間同士の笑いを自分の髪のほどけたことへのあざ笑いだと誤解し、喧嘩して仲間に殺される。孫七は井右衛門を捜したものの、敵討ちは出来ず、井右衛門に返り討ちされるという結末になっている。巻一の一よりも敵討ちとのテーマに忠実に合わせていない話といわざるを得ない。しかもこの話には、敵討ちの発生原因とも敵討ちの成功とも関連を持たない人物が二人登場する。木工弥が浪人だった時に嫁いだ娘夫婦である。貧しかった二人が敵討ちに出るための資金を稼ぐ間、夫はあせりの募った女房に罵られて理性を失い、妻子を殺し、

自分も自害する、という話が孫七と宇助の話の前に、つまり木工弥が殺された後に続くのである。不思議な人物設定と書き方である。新古典大系本の二百五十頁の脚注で谷脇氏が指摘するように、「返り討ちという結末を迎える現実も(略)敵討ちの一面であることを印象づけ、同時に敵討ちそのものの空しさをも感得させる」意図があって、娘夫婦の苦労と悲惨な最期が書き添えられたとも見ることは出来る。「敵討ちの諸相を多面的に描こうとする西鶴のねらい」と見ると納得はいく。しかし西鶴のその狙いを支えるのは、『平家物語』巻四の「競(きほふ)」の話の構成なのである。

源三位入道の嫡子仲綱は名馬をもっていたが、しきりに前右大将平宗盛がその名馬を欲しがっていた。仲綱は、馬を療養させようと田舎へ遣わしている、と口実をつけて馬を渡さなかった。諦めていた宗盛は侍たちにその名馬を見たといわれて腹が立ち、権力づくで強引に馬を譲ってもらう。そして馬に仲綱と焼き印をつけて、人に見せるとき馬を仲綱と呼んでみせびらかした。馬を取られたのも悔しいのに、天下の笑いものになっていることに憤慨する仲綱の様子を伝え聞いた源三位入道が、平家討滅を高倉宮に唆した、と噂される。高倉宮の謀反に従って源三位入道と伊豆守中綱等が三井寺に入ったとき、源三位入道の侍競は館に残り、理由をきく宗盛に朝敵に同参することはできないと偽る。そして信頼を得られたと思ったとき、三井寺を討つための馬一匹を願うと、宗盛は秘蔵していた煖廷という馬を競に与える。競は妻子を隠れさせ、召し連れの武士と三井寺へ行き、馬を仲綱に与える。仲綱は馬のたてがみを切り、「昔は煖廷、今は平の宗盛入道」と焼き印を押して、翌日の夜、六波羅の宗盛邸の門のうちに馬を追い込んだところ、宗盛が激怒したけれども、馬の髪は生えず、焼き印は消えなかった、という話である。

一見、武士の間で起こる馬の取り合い以外には『武道伝来記』巻八の三と「競」との間に関連性を認めがたい。しかし、巻八の三は敵討ちとしての話に適していないとした原因が、もし「競」を意識しての話の構成方法にあったとしたら、失敗に終わる高倉宮の謀反のように、木工弥の子息孫七が返り討ちされる話のパターンは、自然に西鶴の脳裏に刻まれている「競」の影響と見ることができるであろう。敵を討たなければならないのが武士の宿命であり、武士らしさを語る為に敵討ちをテーマにしたとしたら、返り討ちされることで終わる話を意識して作ったとは考えられない。「競」を意識して名馬を取り合う武士の気質を取り立ててみようとする意図があってこそ、敵討ちとはいえない巻八の二の話が西鶴の意識の中に適合した素材になりうるのである。推測のような印象を与えるかも知れないが、話の展開の仕方を対照してみれば、必ずしも推測だけに頼っていないことはおわかり頂けよう。

前述したように、競が登場するのは仲綱が名馬を宗盛に無理やり取られる場面ではなく、高倉宮の謀反が始まった後になる。謀反を起こす以前の話は競が仲綱の秘蔵の馬を貰ってきて仲綱が仕返しできるようにするきっかけにはなっているが、競の存在を必要とはしない。当然井右衛門と木工弥の名馬への執着を描写する場面で競のような役割を果たす人物が必要にはならないのである。そこで馬を引き出す競に対応する役割だけが馬商人によって演じられる。また、二人の武士に相手の武士が名馬に乗っていたことを告げるそれぞれの伝達者があることも一致する。木工弥が殺されて敵討ちする人物が登場しなければならないとき、競のような人物が必要になる。そ

れが娘夫婦と子息孫七と弟宇助である。そうすると娘夫婦の苦労と悲惨な最期は、何の意味を持つのだろうか。競の役割は仕返しをする部分が井右衛門の返り討ちへ、謀反の失敗が娘夫婦をはじめとする敵討ちの失敗へと活かされたと見てよい。巻八の一で必然性のなさそうに見える娘夫婦の登場は、西鶴が「競」を名馬を取り合う武士の話として意識していたからこそ可能だったのである。

以上、名馬の取り合いという武士の気質から見る敵討ちは、『平家』の「競」を意識した結果、敵討ちでありながら敵討ちとは言えない話になってしまったこと、「競」の影響により話の展開上必ずしも必要としない人物まで登場していること、名馬を取られた人の仕返しという点で一致していることを指摘した。西鶴に典拠とする話なり作品なりと全くの一致を図る周到綿密さを期待できないほど、俳諧的な連想の方法が頻繁に使われるということを念頭においてみれば、巻八の三の話は「競」を知る読者には、冒頭文で西鶴の言う「昔は、武士の名馬を持事、第一にたしなみぬ」という「競」の武士たちと今の武士たちとを同時に思い浮かばせて、相互補完する形で読みの幅を利かせたに違いない。これが時代設定の二重構造のように、話の素材を規制しながらも話の幅を利かしている二重構造的な話の構成方法といえよう。そして誰もが知っている『平家』の話を暗示する形で展開する話が全くの敵討ちの話にはなっていなくても、戦乱の時代とはその生き方が違っていても、意識の中ではれっきとした一人前の武士として生きているつもりの武士を暗示的に照らし合わしている。それを示唆するのが武士の痴情関係とか横恋慕への関心であろう。

〈三〉

他に、『平家物語』の世界が投影している話として、巻六の一「女の作れる男文字」もあげることができる。『平家』巻六の小督の話である。周知のように、冷泉大納言隆房卿が少将であった時に恋仲だった小督は、思いに沈んでいる高倉院を慰めようとする中宮(建礼門院)によって、高倉院に差し上げられる。隆房の手紙さえも受け取らず、高倉院の寵愛に応えていた小督が清盛の激怒を漏れ聞いて嵯峨に隠れてしまう。悲しみに暮れていた高倉院の命を受けた弾正少弼仲国が嵯峨の隠れ場所に尋ねてくる。琴の名手だった小督の琴の音を聞いて住処を発見した仲国は、出家の決心をしている小督を連れの者に見張らせて、高倉院に報告する。高倉院は小督を御所に隠しておくが、清盛に発見され、小督は尼にされる。それが高倉院の崩御の原因の一つである、という内容である。

『武道伝来記』巻六の一の場合は、巻一の一と同様に人物設定が単純化されていて、激怒して尼にさせる清盛の役割と、寵愛する高倉院の役割とを兼ねた随夢という武家の入道がいて、女中の一橋を寵愛し、折檻したあげくに、殺してしまう。折檻の原因は、一橋のために随夢の寵愛を奪われた薄雲という女の嫉妬にある。一橋に深く思いをかけた男の折り文をこしらえて、あちこちに落として置いても誰も拾わず掃き捨てられるが、ある時、随夢の目にとまった恋文には、一橋と忍び逢った後の思いが書き連ねてあった。随夢は女中頭の木幡に命じて、一橋に事情を聞かせる。無実を主張する一橋は、随夢の命によって庭に引き出され、裸にされたり指の爪を抜かれたりする折檻を受けた後、指を切ることを拒んで切り殺される。

『平家物語』では小督を尼にしたとされる話が、巻六の一で殺す

形になったのは、敵討ちのテーマに合わせるためであるが、寵愛を受けたり理由もなく迫害を受けたりする小督のイメージは、そのまま一橋に受け継がれている。ただし、高倉院と清盛の二役を随夢一人でこなすという点が違うといえる。また、隆房が歌を詠んで小督のいる御簾の内に投げ入れても、手に取らず庭に投げ出させることも、一橋が殺されて敵討ちの原因になる話、つまり「男文字にて、一橋にかけしや思ひのふかき所、見えわたりたる折文を、ここにかしこに落し置しに、はじめの程は、するの女も取あげずして、はき捨、塵塚に埋みぬ」と、薄雲の策略に生かされる。そして仲国が小督を探し出し、小督が出家を決めたことを高倉院に知らせることまでも、木幡という女中頭を登場させ、一橋に真偽を聞きに行かせるという精細な配慮が見られる。木幡はさほど重要な登場人物とは思えないからである。

巻一の一と同様に、巻六の一「女の作れる男文字」のこの話も敵討ちと直接の関連を持たず、話全体の七割位の分量を占めていることが、『平家』の小督の話を強く認識していたことを物語る。それに敵討ちの対象は薄雲になるべきであるけれども、随夢が敵とされ、一橋の妹小吟に殺されるが、随夢を殺して自害した小吟の行為を「女のはたらき、前代ためしなき敵うち」とするなら、「薄雲といへる女の仕業あらはれ、隼人が手にかけて打て捨」られたことを書き添える必要はないはずである。これは、敵討ちよりは一橋の不幸に関心が寄せられた話と言うしかない。なぜ、このような女物語りが敵討ちの話になれるのか。まずは武士というと戦乱の時代の武士の諸像を連想する。そして代表的に源平の戦いによって奢るものの横暴として『平家』の女性説話が思い出されるわけである。その意識があるからこそ、女郎を殺してその妹に敵討ちされる武士像が創出できるのだろう。武士の敵討ちを描く西鶴に無常のイメージを持つ『平家』の人間群像が強く認識されていることを表す証拠である。

こうした例から見ると、敵討ちのテーマに合わせた形で話をまとめていても、『武道伝来記』の創作に際して、西鶴が脳裏で描いた武士の姿の中には、『平家』に見られる武士の姿が相当連想されていたことが分かる。敵討ちを果たすために苦労する武士の姿は余り描写されず、主に敵討ちの発端になる話に関心が持たれ、またその発端も巻六の一のように武士の女色による女の嫉妬が巻き起こす家内騒動になるわけだから、一層『平家』の清盛の横暴が下絵のように暗示されるのである。「敵討ちは一つの起点にしかすぎず、彼の武士に対する考え方、或いは敵討ちに対する認識は殆どなく、敵討ちを契機にして一つの物語をいかに仕立てていくかに意識が集中されていた」[1]という見方は、こういう面白い側面を指摘しているが、話の面白さを生かす部分だけを重視する作家としての西鶴の意図が分かるとも限らないであろう。というのは、表面的に「中古武道の忠義」の話に仕立てながら、内容的には忠義とは裏腹な武士の世界を書いている西鶴が見えるからである。つまり、忠義を重んずる存在としての武士のイメージが稀薄で、寵愛をめぐる女の葛藤の物語になったのは、『平家』の世界の清盛と小督という特定人物のイメージにこだわり、その固定した人物像と敵討ちとを結びつける上には、やむを得ないことだったのかも知れない。しかし、この話から、読者は、武士の重視する体面・義理などの外面的な姿以外の部分を、清盛の小督への迫害を下地にしながら浮かび上がってくる、自分たちと変わりのない人間としての武士を見てしまうはずである。

武士の外面だけでなく人間としての私生活に興味を持っているのは、続く巻二の四つの章が主に武士の結婚風俗とか恋への執着に関わった話を以って敵討ちに仕立てることで分かる。というのは、巻一では武士の忠義と義理を何よりも優先する理念的で理想的な話をもって敵討ちが展開されていたのに、巻二になるとうって変わって理想的な武士像がなくなり、恋人がいて見合に応じない女の相手を殺す武士(巻二の一)、祝言の日になって仲人に嫁の不器量を理由に結婚破棄を要求したあげく殺人沙汰に及ぶ武士(巻二の二)、祝言の日、若者たちの水掛け祝いが原因で落書きの相手も確認せず殺してしまう短気な武士(巻二の三)、縁組みを断られた恨みで人魚を射止めた相手の手柄をけなす武士(巻二の四)、という具合に、卑劣な武士による敵討ちの話になってしまう。これは西鶴のすぐれた編集意識の反映とも受けとめられる。しかし巻三が衆道関係で起こる敵討ち、巻四が武士の間で起こる些細なもめ事と短気による殺し合いという傾向を持つものの、巻五以後の話が巻毎に纏まった傾向が見られないので、各巻毎に多面的な敵討ちを徹底的に描写しようとしたとは見えない。ただ忠義と義理を大事にする武士とは違う側面の武士を描写しようと意識していた、とだけは指摘できよう。だから卑怯・卑劣な上位の武士であっても、武士社会の絶対状況に従うしかない下級武士の復讐を女房とか(例えば巻七の一)、女の兄弟(巻六の一)にゆだねる形で敵討ちが行われる話が多い。

『平家』から求めた例を通してわかるのは、西鶴には『平家』の世界が具体的な武士の話として連想されていたという事である。忠義の模範として先腹を切る若侍の話の背景に忠義という理念を踏みにじった清盛のイメージが利用される方法は、頗る暗示的といわざるを得ない。それは昔という時代設定とともに、間接的に表現できる武士の本質的属性の暗示である。このような武士の描写の二重構造は、それぞれの話の二重構造にもつながっているともいえる。このような西鶴の認識の二重構造によって、二章で引用した巻一の一の話等は武士の外形的な側面を照明していた例として指摘できる反面、巻六の一は人間としての武士の内面に焦点を合わせた話と受けとめられる。「中古武道の忠義」という西鶴の言葉は、当然社会を支配している階級としての武士の姿を連想させるわけだが、もし西鶴が人間としての武士を見ていないなら、巻六の一をはじめとする数多い武士の痴情関係と横恋慕の話を盛り込んで創作に臨むことはないからである。だから、西鶴の「中古武士の忠義」云々は、あくまでも町人の立場から見る武士という身分の人間の外面的な姿だけを指す言葉以外の意味を持たないと見るべきである。「中古武士の忠義」だけに素材を限定していたとすれば、一巻の話のように命を捨ててまで守ろうとする武士の気概と義理を大事にする話だけに限定されなければならない。武士像の多面的な姿を照明することは、人間としての武士に関心をもっていることを証明する。『武道伝来記』の二重構造は、時代設定にのみ限るわけではない。平和な時代を生きている同時代の武士を見ながら自然に脳裏に刻まれている、人間という生き物としての武士と、社会的に階級と理想・価値観を異にしている存在としての武士とが、話の形式と内実を重層的に構成する構造をも持っているのである。

〈四〉

高尾一彦氏は、『武道伝来記』の敵討ちの内容を「仇討を賛美す

る物と、仇討ちの不合理無意味さを暴露する型のものとの二種類に分れる」と分類する[1]。この分類は、『武道伝来記』における西鶴の創作意識というのが、一貫性に欠けていることをあらわす分類でありながら、一貫性に欠けている話の集合体であるからこそ、敵討ちというテーマを通して描いた西鶴の武士像が多面的に造形されていることをあらわしているともいえよう。氏の二種類の分類は、またそれぞれ二種類の下位分類がされていて、武士批判の性格を持っている話と、庶民的人情に訴える話に分けているので、内容的に様々な敵討ちの話を盛り込もうとする西鶴の意図があったことも指摘できるのである。もちろん武士批判の性格を何処まで認められるかという問題もあるが、本論では氏の分類の仕方が、私の言う作品の二重構造を指摘した分類と見て差し支えないだろう。

前章で見たように、『武道伝来記』には『平家物語』から求めた話の世界が「中古」という不確実な時代設定のもとで、「忠義」という社会的な行動を決める理念から見る武士の姿と、一個人の人間の内密な愛情関係から見る武士の姿とが、敵討ちというモティーフをもって描写されている。これも高尾氏の分類に従えば、武士批判の性格と庶民的人情に訴える性格の話になる。つまり武士批判の性格があるかどうかは別にして、無意識のうちであったとしても、『平家物語』から取材した話からも武士の社会人としての側面と個人的な側面の両面を見ている西鶴の視線が現れているといえる。人間の表裏の両面をみてしまうのは、時代設定・話の構成方法・人物描写などを通してみてきたように、西鶴の持っている生来的な作家的姿勢なのである。しかし、時には両面を一緒に見てしまう西鶴の習性がもたらした結果としてみるには、多少意図的な表現と見るしかない話もないとはいえない。奇談異聞的な話をもって敵討ちの発端を作る例が多い事に注目してみよう。

巻三の三「大蛇も世に有人が見た様」には、敵討ちの発生原因として冒頭部の奇談異聞がある。人魚・狸・龍・むかでなど化け物の登場する説話の世界のような話を、便宜上、宗政五十緒氏の指摘している奇談異聞という言葉を利用させていただくことにする[2]。晩春の堺で侍衆が小舟に乗って舟遊びをしているとき、にわかに海上が荒れてきて水面から五丈ほどの龍がうねり廻っているのが見えた。舟に乗っていた人々は肝をつぶし、慌てふためいていたが、

石目弾左衛門、艫先に立あがりて、大身鑓を上段に構へ、大音あげ、「正躰いかなる物ぞ。此治れる時津波、太平の御代にあやしき姿、天晴、僻者なるべし」と、海上を白眼つけたる有様のゆゆしき。ふしぎや大蛇、淡路が嶋の方へゆくとみへて、気色しづかに浪おさまり、

みんな無事に汀に漕ぎ戻ることが出来た。その後、石目弾左衛門を除く二人の臆病侍の成川専蔵と木村土左衛門は、「夕の夢見、十日にならぬ祝言」というあだ名でわらいものにされていた。理由は荒れた海上で龍を見たときの臆病ぶりである。「こんな所へ乗て来るものか。夕の夢見あしきに、こまいといふたを女共が、それでは約束の義理が欠るといふて、此様なこはい目をさせる」と泣きだし、「何も心にかゝる事はなけれど、祝言してから十日にもならぬ女ばうが、晩から淋しからふ」と屋敷の方を眺めながら涙ぐんでいたからである。これは、舟遊びの話で笑いものにされた成川専蔵が不名誉のため敵討ちをする話ではなく、その子息滝之助がうわさ話をしていた新兵を、剣術の練習で起こった勝負の判定にかこつけて、巧

妙に真剣での勝負へ誘導して敵を討つ話である。したがって、滝之助の心底の中での敵討ちになっていて、西鶴の意図する多様な敵討ちの様子を見せてはいるが、冒頭部の舟遊びと敵討ちが一つの世界の話として直接つながっているとはいえない。

しかし、西鶴が利用している『平家』の世界から西鶴の敵討ちの世界への変化を吟味してみると、彼の意識する『平家』の世界がどのような形に変わっているかわかる。「競」の世界が巻八の三の世界を無意識のうちに支配してしまうように、因果関係の曖昧な敵討ちの話にならざるを得なかった理由の一つとして、『平家』の文覚説話への意識が指摘できる。文覚説話との関連は、既に谷脇氏も新古典大系本の脚注で『源平盛衰記』の文覚描写との類似性を指摘しているが、引用したように舟の舳先に立って龍をしかる石目弾左衛門の威容は、まさに伊豆に流される文覚が荒れる海上に向かって見せる姿そのものである。この部分は謡曲『船弁慶』の影響も窺われるが、覚一本『平家物語』巻五「文覚被流」を参照することではっきりする。慌てふためいて船の底にへばりついて喚いている人々の姿も『平家』と同様である。しかし、その臆病な人物たちを拡大し戯画化するところに『武道伝来記』の西鶴の狙いはあったのである。

西鶴は、奇談異聞風といわれるこの冒頭部の話で、文覚の面影を残していながらも、文覚以外の慌てふためく人物を具体的・戯画的に描写することによって敵討ちが起こりうる状況を作り出している。「夕の夢見、十日にならぬ祝言」とあざ笑われる人物を作りだし、その風聞が名誉を重んじる武士の自尊心に傷を付けるということで、巧みに敵討ちの話にすり替えられている。文覚のイメージを利用する武士石目弾左衛門の勇猛さが冒頭部を飾っているわけだが、西鶴はむしろ臆病な武士のあわてる姿に関心をもって具体的に戯画化し、敵討ちが起こりうる状況にしている。このように、奇談異聞の要素を利用する話が敵討ちと直接の関連を持たないようであっても、名誉を守ることを命よりも大事にする武士の気質が前提になっている勇猛と臆病の両面描写は、戦乱の時代の武士とは違う江戸期の武士像が投影されたものであり、また西鶴の控え目の皮肉の反映としても見られる。勇敢な武士石目弾左衛門によって「成川専蔵・木村土左衛門が臆病の事、いはずしてあらはれしか共、誰遮て評判する者もな」かった時代であって見れば、文覚のイメージを印象づけるようで実は臆病武士を強調している意図も読みとれるからである。その点、武士の臆病を取り扱っている章が多いことが、このような意図を裏付けるのであろう。読者の知っている『平家』の人物文覚を暗示する形で昔の時代を連想させ、今の武士の姿を皮肉るかのように臆病武士として戯画化する創作方法は、中古という時代設定をするしかない西鶴の本音を反映するのではなかろうか。

諸国話風の異聞奇談を持つ章は、巻二の四(人魚)、巻三の二(狸)、巻三の三(龍)、巻七の三(むかで)等を挙げられる。巻三の二を除くと、武士の臆病を語る方法として異聞奇談が冒頭部に書かれている。それ以外にも巻五の四(犬)が百物語を通して、巻八の四(殺生石の鳥)と共に武士の臆病が敵討ちの発端になるという面で同様の話として挙げられる。というのは、文覚説話の利用方法からも分かるように、敵討ちの発生原因の一面として、名誉・義理等の武士の生きるための最高の価値基準とは裏腹に、武士としては恥ずべき臆病によって発生する敵討ちを見つめる西鶴の視線があったことである。巻一の四つの章で、義理堅く名誉を重んじる武士像の潔さをあれ程強調し

たはずの西鶴であるのに、一方でこれ程多くの章で武士の臆病を敵討ちの発端にしているのは不思議と言わざるを得ない。このような場合、人間の生きる状況を常に相対化してしまう西鶴の、同時に人間の両面性を見る人間認識のパターンを指摘しなくては解決の糸口が見付からないのである。主君に従うため先腹を切って殉死する二人の若侍の話の背景に、逆のイメージを持つ清盛の横暴の一つとして後白河院監禁事件を思い浮かべて創作に臨むことからも、西鶴は論理と理屈より、類似した状況の連想から新しい世界を作り上げる方法を使っていると言える。人に自分の臆病を笑われても、自分の臆病の問題自体は棚に上げて、あざ笑った人間に対しての仕返しだけに使われる敵討ちという名分の認識無しで、武士の臆病と敵討ちという武士階級特有の習慣は結びつきがたいのではないだろうか。

巻六の三「毒酒を請太刀の身」は、『武道伝来記』の三十二話の中で最も長編的構成をとり、臆病な当時の武士を露骨に表現している章である。

殿の命によって家中の武士に自信のある武芸を書き付けて出させたところ、熊井五助が書き付けた武芸の多さのことを外山白右衛門、坂野用助、乙見滝之進らが陰で疑っていた。従弟の白橋元左衛門から伝え聞いた五助は、殿の前で自分の嗜んでいた武芸を披露して見せた後、書き付けの事実を悪く評判されたことは堪忍ならぬと三人宛に状を送る。「死る事はすかぬ」腰抜けの三人は、自分たちは悪評はしたことがないが、吾等を憎む人がわざと広めた噂かも知れないから、勘弁してくれとあやまる。そうして死ぬことは免れたけれども、五助に会う度毎に感じる気まずさを堪えられなかった三人は、仲直りにかこつけて五助を食事に誘い、毒を入れた食物で殺してしまう。医者も事実を軽率にはいい出せなかったので、五助の死はそのまま不思議な病気と片付けられた。腰抜けの三人は五助を殺したことはいわないのが、暗黙の約束だった。しかし白右衛門の家に集まったある夏の日、白右衛門の家来関内に月代を剃ってもらっていた滝之進は、激しい雷に気が動顛して雷の落ちそうでない場所をさがして逃げ回った。

「関内、まづ待てくれよ」と、半分頭剃かけしを、周章て立さはぎ、「天井の板の厚き所はないか」と逃廻り、脱捨し単羽織の有程引かぶり、「桑原々々」と身を縮め、かた隅に倒臥たるえかしさ、白右衛門・用助、大笑ひして、「仮も結構なる御侍、それそれ、又ひかりたるは」と、おどしかけて興がりけるに、程なく空はれて後、滝之進這出しを、「其頭つきは、どこの去荷物を持れしぞ。仮も億病千万なり」と、おどけたるを、滝之進、虫にさはり、「最前も笑物にするのみならず、比興なる侍などいはれ、それさへ心にかかる。人には物のいひやうあり。雷は武辺の外、好といふ者なし。もし比興のせんさくならば、其方達こそ、侍畜生なり」と、顔色をかへていへば、座興に思ひし両人も、此一言に堪忍ならず、「侍畜生とは何ぞ」と、刀を取まはす時、「されば、過し年、熊井五助と太刀打はならずと、何ぞや、女童のたくむ、毒薬をもつて殺す。勿論我は、同心にあらざれ共、それを改むれば、傍輩のちなみをむなしくすると、思ふ計にだまりぬ。何と、其しかたが、侍のいひ出す事か」と、同じく刀を取まはす

このような次第で滝之進は二人に殺される。この後、滝之進の息子角之丞が父の敵の二人を討つわけであるが、母親は父等三人が行っ

た五助毒殺の不義を語り、敵を討った事実を公に知らせないようにする。結局、敵を探し回っていた五助の息子五七郎に角之丞も殺されるので、話は敵討ちの筋を通しているとはいえる。

しかし、引用部分からも分かるように、巻六の三は武士の臆病と卑怯が話の中心に置かれている。最初から腰抜けの三人武士が五助の武芸の書き付けを疑ったり、五助に怒られると彼の武芸の強さを恐れて謝ったりする。そうでありながら、五助に謝ったことが評判になるのを恐れ、毒薬で殺す、という卑劣きわまりない武士たちである。三人の武士の臆病と毒殺陰謀がいかにも武士社会の一面であるかのように、西鶴の視線が彼等三人を追っている。そして成功したはずの毒殺の秘密の暗黙が、三人の間で起った臆病武士へのあざ笑いと「侍畜生」という罵倒の言葉で破れ、卑劣な武士同士の殺し合いと敵うちの状況が発生する場面を具体的に描写している。高尾氏は、この武士たちの「侍畜生」言い争いを西鶴の武士批判と見ているわけである。この描写が武士批判であるかどうかは明確にしにくいが、少なくとも義理と名誉を重んずる武士という人間集団の中で起こっている、非武士的な、しかし人間的な事件として見ているとはいえよう。だからこそ、奇談異聞的な冒頭部の話をもって敵討ちの起こりうる状況にしている話が多いのであろう。

奇談異聞的な冒頭部の話が敵討ちと直接の関連を持つというより、敵討ちが発生する状況を作る役割をするのは、巻三の三の例でも見たように、笑い者にされることを嫌う武士の特質を利用して敵討ちの原因にしようとする西鶴の狙いのためである。というのは、笑い者にされる武士を強調することであり、その笑い者の武士を強調する意識の裏には、義理と名誉を命よりも重視する武士という鎧に隠されている、本質的な人間としての武士の姿を見てしまう西鶴の冷笑的な視線が存在するということである。巻七の一のように上意討ちにかこつけて家来を殺し、その女房を自分のものにしようとする武士を描き、巻五の二のように自分の方に靡かない若衆を奪うため、その念友に罪を被せて殺す武士を描くなど、非武道的な素材をもって敵討ちの発端を作る事は、この冷笑的な人間認識を武士の世界でも否定できない人間の本質として認識しているから出来ることである。

それは、巻三の三が『平家』の文覚説話を印象づけるような冒頭部でありながら、臆病な武士を印象づける方向に話を切り替えている西鶴の表現の仕方のように、義理と名誉を重んじるようで実は人間としての臆病もある武士を描く西鶴の方法と同じものである。このような方法を取らざるを得なかったのは、序文で作品に書かれる敵討ちの時代を「中古」と定め、「心のうみ静に、御松久かたの雲に、よろこびの舞鶴是を集ぬ」と、松平(徳川)氏の太平の世をよろこぶ舞鶴(西鶴)としては当然ともいえよう。つまり、太平の徳川時代をよろこびながら不名誉な武士の話を書くためには、遠い過去の時代を設定した方が無難であるように、義理堅く勇猛な武士を印象づけた後で臆病で卑怯な武士を描いた方が無難だからであろう。だから『武道伝来記』の冒頭部というべき巻一の四章が義理と名誉を重視する武士たちの話が主流をなしているのである。好色物・町人物と違って冒頭文・批評文が殆ど見えない『武道伝来記』では、批評というかたちで顔を出せない西鶴の皮肉めいた視線が臆病武士を積極的に戯画化することで同様な効果が得られることをひそかに期待するしかなかったからかもしれない。

〈五〉

以上、『平家』素材の利用方法から見る『武道伝来記』の二重構造の一端を検討して見た。勿論『武道伝来記』には、引用した例の外にも多様な敵討ちの話が『平家』以外の武士の話、例えば『太平記』・『曽我物語』・『源平盛衰記』等を利用している。あえて『平家』に限定したのは、時代設定の問題をはじめとして『武道伝来記』の創作に臨んでいる西鶴の創作方法を検討することで作品の本質に接近してみるためである。元禄七年刊行の『古今武士鑑』（椋梨一雪著）の序文に

武道伝来記と名付けて、世に弘むるあり。窮之見るに、一として実なることなし。隈がはしき虚妄の説のみなれば、人の教になるべき物にしも非ず

という評がある。浮世草子の『武道伝来記』が虚妄の説であることは、現代の文学を受容する立場から見ると当然ともいえるが、当時の人々には人の教えに役立つ物だけが読み物として価値があると思われただろう。しかし、「みだりがはし」い所に西鶴は関心を持っていたはずで、だからこそ浮世草子であり得るのである。『武道伝来記』の浮世草子たる所以は、寧ろ「みだりがはしき虚妄の説」に適する話の場合に認められるのではなかろうか。「武道の忠義、高名の敵討」に適する話がひたすら褒め称えるだけだけれども、逆にそれと相反する話の場合は忠義とか高名とかに上塗りされてない生の人間の武士が現れている。時代を江戸以前にするしかなかったのも、「みだりがはしき虚妄の説」に関心を持って武士の諸像を形象化する町人作家の西鶴としては、些細なもめ事で切り合いになるような軽率で短気な生の人間として描写される武士の姿を、名誉・義理のためには命を惜しまないという価値観を持つ人種として糊塗するしかない時代の状況があったからであろう。

高尾氏の分類のように武士批判のごとく読みとれる敵討ちは、この生の人間の武士に関心を持って書かれた話で顕著であるはずである。しかし、好色物・町人物といった西鶴の浮世草子にはよく用いられている地の文での批評が『武道伝来記』には殆ど書かれていないという事実は、臆病・卑劣な武士像を人物描写を離れてまでは書けないからだと考えてみると、もし西鶴に武士への批判的な意識があったとしても、積極的に武士批判の意志をもって書けるとは思えない。やはり控えめに書くしかなかったのである。その武士階級への遠慮の意識があったから、作品の実在とは違って「中古武道の忠義、高名の敵討」と強調するわけである。殉死・武家の面目・武士たちの義理堅さなどに注目している話が巻一に集中していることが、この西鶴の武士階級への意識の強さを表した例である。

しかし西鶴は、どんな素材を使っても、人間への冷笑的で傍観的な視線を忘れない。勇猛な生き方をしているはずの武士世界を描きながらも、人間としての本質に触覚が働く西鶴の神経組織は、卑劣・短気・臆病といった武士としては恥じるべき姿に視線を投じてしまう。『平家』素材の利用方法から見る西鶴の暗示的な方法は、このような神経の持ち主として採るしかなかった二重構造の方法である。殉死という忠義の表し方の描写を、読者の誰もが知っている鹿ケ谷事件の処罰として後白河院を監禁する非忠義的な世界を話の構成方法として使うこと、名馬への執着から起こる切り合いが宗盛の貪欲と横暴を代表的に表す「競」と話の構成が類似すること、女性

説話として代表的ともいえる小督の話が武士の痴情と横暴の話に生かされること、文覚の堂々としたイメージを生かすようにして実は臆病な武士を強調してしまう『平家』素材の利用方法は、暗示的な方法といわざるを得ない。このような『平家』の世界を暗示的にほのめかしながら間接的に当代の武士に対する批判の印象を与える方法は、時代を当時とずらして設定して置いて当時の武士像あるいは敵討ちの話を書くという方法と意識の面で同質の物といえるだろう。

『武道伝来記』の世界は、このような意味で武士に対する批判的な作品といえる。そしてその批判は二重構造の中でしか成り立たない積極的な批判の強度を持たない物である。『武道伝来記』の否定的評価は、敵討ちという武士世界の習慣を書きこなせない町人作家西鶴の力量の限界として見るべきではなく、二重の構造をもってまでも暗示的に表現しようとした西鶴の立場から理解すべき問題である。話を展開とは無関係の批評文と冒頭文を利用して、当たり前の教訓と人間の批評をする西鶴としては、あまりにも傍観的で客観的な人物描写に一貫するのである。

［注］

（1）引用は岩波書店刊、新日本古典文学大系の『武道伝来記・西鶴置土産・万の文反古・西鶴名残の友』による。

（2）前田金五郎、岩波文庫本『武道伝来記』補注四及び、氏の論文、「『武道伝来記』の事実と創作」（『文学』昭和四十一（1966）年十月）に時代と典拠についての言及がある。

（3）谷脇理史、「『武道伝来記』論序説　―読みの姿勢をめぐって―」、『文学』五十一号　昭和五十八（1983）年八月

（4）塚本学、「生類憐み政策と西鶴本」『人文科学論集』十四、昭和五十五（1980）年三月

（5）谷脇理史、前掲論文

（6）渡辺忠司、『町人の都大阪物語　商都の風俗と歴史』　中公新書　平成五（1993）年九月

（7）巻八の一「野机の煙くらべ」は、前田氏の指摘するように寛文十二年二月三日起こった浄瑠璃坂の仇討ちの史実を典拠にしているが、谷脇氏は事件の発端が巻八の一に、敵討ちが巻七の二に用いられたとし、公許されていない敵討ちの描写をはばかって場所と人物名を換えたものと見る。

（8）巻八の四「行水でしるゝ人の身の程」は、寛永十一年渡辺数馬・荒木又右衛門による伊賀上野の敵討ちを書いたが（前田氏指摘）、谷脇氏は五十年以上前の公許された敵討ちなのでおほめかす必要がなかったとする。

（9）前田金五郎、前掲書　補注十六

（10）江本裕、「西鶴武家物についての一考察　―『武道伝来記』と『武家義理物語』との意識をめぐって―」『国文学研究』三十四集　昭和四十一（1966）年九月

（11）高尾一彦、「西鶴論」『近世の庶民文化』所収　岩波書店　昭和四十三（1968）年三月

（12）宗政五十緒、「『武道伝来記』の構造」『西鶴の研究』所収　未来社　昭和五十二（1977）年十一月

（筑波大学外国人研究者・漢陽大学校助教授）